



第25回日本病院総合診療医学会学術総会

2022年8月19日(金)・20日(土)

ランチオンセミナー 2

急性期病院における アセトアミノフェンの有効性と安全性

日時

8月19日(金) 12:00~13:00

会場

WEB開催

WEB視聴サイトにてライブ配信

座長

小島 太郎 先生

東京大学大学院医学系研究科 老化制御学 講師

演者

谷口 英喜 先生

済生会横浜市東部病院 患者支援センター 患者支援センター長

学会参加方法

第25回日本病院総合診療医学会学術総会ホームページをご参照ください。
<https://www.tohoku-kyoritz.jp/hgm25/index.html>

※WEB開催のため、人数制限や事前の視聴予約、整理券配布はございません。

共催：第25回日本病院総合診療医学会学術総会/あゆみ製薬株式会社



あゆみ製薬

Abstract

急性期病院における アセトアミノフェンの有効性と安全性

済生会横浜市東部病院 患者支援センター 患者支援センター長

谷口 英喜

急性期病院における疼痛管理の質によって、遷延性術後痛 (chronic postsurgical pain: CPSP) が生じることが明らかにされた。国際疼痛学会によれば、CPSPとは「術後少なくとも3カ月持続する痛み」と定義される。CPSPは手術患者の10～50%に発症し、そのうち2～10%は日常生活に支障をきたすような重篤な痛みである。CPSPを発生する5つの因子が明らかにされ、そのひとつが急性術後痛である。急性術後痛では、痛みの強さの最大値より術後痛の持続時間が関連し、さらには、疼痛の緩和に要した時間の長さが関連する。

また、急性期病院でも超高齢化社会の到来により、対象となる手術患者の高齢化が進んでいる。このため、慢性腎臓病をはじめとした合併症を有した手術患者が多く、鎮痛剤の選択には慎重を要する。さらには、術後早期回復の概念が普及して手術翌日には、離床し、飲食が再開されることがほとんどである。

急性期病院では、以上のニーズに応えるべく、適切な疼痛管理計画が望まれる。疼痛管理の原則は、多角的疼痛管理(MMA)、定時投与(ATC)、Opioid sparingの3つである。

アセトアミノフェンは、MMAのひとつのアイテムとして、安全域が広いのでATCが可能で、Opioidの使用量を減量できる。本セミナーでは、急性期病院の疼痛管理で使用されているアセトアミノフェンの有効かつ安全な使用法について、超急性期病院である当院での実践を例に概説する。